



ボクシング協会に拍手

映画「袴田巖 夢の間の世の中」の上映パンフレットがとてもよい。青空と白い雲を射抜くように、袴田さんの直筆によるタイトル文字がくつきりと浮かぶ表紙。表紙をめくると右ページいっぱいには袴田さんがいる。左ページは、こんな映画は、ウンなんだ！ わしゃ、あんなによぼよぼじゃねえんだ！ 完成試写後の袴田さんのセリフに寄り添うように金聖雄監督の弁。ページ上部には、映画の中で幾度も出てくる月。月が知っている本当のことは、この映画の中にある。次ページ袴田事件略年表は重要。

続いて、漫画家のやくみつるさんと監督の対談、映画監督の周防正行さん、精神科医の香山リカさん、詩人の谷川俊太郎さんをはじめ、各界から寄せられた文章満載。「獄友が、こうして外で会えると呼び合う仲間、布川事件無罪決定の桜井昌司さん、やはり足利事件無罪決定の菅家利和さん、狭山事件の犯人とされ今も無実を訴え続けている石川一雄さんたち。石川さんの妻、早智子さんは、明るくて救われる。秀逸なのは、イラストで綴る「秀子さんのシンプルな部屋、片付けのコツ」と、「秀子さんの今日もイキイキ、元気の秘訣」。この項目で袴田さんの日常は、お姉さんの

日常で支えられているのがわかる。さてそして「日本プロボクシング協会袴田巖さん支援の軌跡」だ。一九九一年三月一日、同協会のファイティング原田(当時会長、以下敬称略)が、後樂園ホールのレストラン上から、再審開始を訴え、袴田支援を正式に表明。二〇〇六年、東日本ボクシング協会は、輪島功一(当時会長)を委員長にして、「袴田巖再審支援委員会」を設立。〇六年、輪島功一をはじめ、ボクシング元世界チャンピオン五名が、早期再審開始を訴える約五〇〇筆の要請書を最高裁に提出。一四年には、四八年にわたる収監と死刑の恐怖を耐え抜いた功勞により、世界ボクシング評議会(WBC)認定フェザー級名譽王者のチャンピオンベルトが贈られた。WBCもやるね。ちなみに、袴田さんが出席した後樂園ホールリング上での贈呈式に参加したのは、第四代WBC世界ミニマム級王者・大橋秀行、第三世代WBC世界ライトフライ級王者・井上尚弥、第二世代IBF世界ライトフライ級王者・八重樫東、第三世代WB A世界スーパーフェザー級王者・内山高志、第二世代WBC世界バンタム級王者・山中慎介など。紙幅が尽きてしまった。日本のプロボクシング界、なんかかつこいい。

話の特集 企画・構成 矢崎泰久

な。実はぜんぜん違う。特に故郷としてのクニと、国家としてのクニが大きく隔たった近現代では、大いに違う。友人や家族は人間のつながりであり、故郷は、そういう人間関係や思い出と結びついた、個々人にとってきわめて具体的な地域。でも日本国に人間関係や思い出が結びつく人民はまずいない。それはただ法定の区域であり巨大な管理システムだ。日本のサクラやフジサンはシンボルに過ぎず、故郷の生きた草木や山河とは違う。つまるところ国家とは、政治が作る地図上の幻想に過ぎない。それをワガと言えるのは、国家と同じ幻想である「天皇の赤子」や「日本国民」だけ。こそ、国家が政治による幻想であるなら、当然、国民も幻想でしょ。てことは、国会前で「コクミンなめんなよ」とラップ打つてる若者は、国家幻想の舞台に為政者と並んで立っていることになる。すると、イザ、日本国の危機を訴えられたら、雪崩を打って大日本大政翼賛会へ！そんな予感する。うへ、老婆の心全開。まあね、わかっているワガクニ意識なら、それはそれでいいんだけどね。ま、んなわけだから右翼諸君、最近の愛国心の衰退を気に病むことはない。現に体制派がやっているように、家族を称え郷土愛をおおりに、仮想敵国の脅威を一滴注げば、すわ家族の危機、と誤解したワガ群が、国防軍備に傾倒するさ。